

カフカの「城」に関する試論(5) : 成立過程をめぐる覚書

著者	芳野 昇
雑誌名	日本歯科大学紀要．一般教育系
巻	15
ページ	1-13
発行年	1986-03-25
URL	http://doi.org/10.14983/00000285



カフカの「城」に関する試論

V. 成立過程をめぐる覚書

Versuch über Franz Kafkas Schloß

V. Noten um den Entstehungsprozeß

新潟歯学部 芳 野 昇

Noboru YOSHINO: Nippon Dental University, Hamaura-cho,
Niigata 951, JAPAN

(1985年11月29日 受理)

1

フランツ・カフカ最後の長編小説『城』(Das Schloß)の理解はとりわけ多義多様にわたっている。それは何よりも作品自体が極めて緻密な構成により計画されたものである反面、あまりに肥大化していった構想がしだいに錯綜と冗漫さとを帯びていって、ついには未完に終わってしまった作品であることによる。それにまたカフカ自身はそもそもこの作品を「書くためのものであって、読ませるためのものでない」¹⁾作品として、その創作過程を努めて秘めて、もらさない執筆経緯をたどったことにもよる。更にまたこの作品は1922年の2月から9月にかけての、作者カフカにとってはそれまでの人生に対する挫折感(あいつぐ婚約解消、父親との葛藤、創作への行き詰まり)と、迫りくる病魔と仕事への不安感とに苛まれていた時期に、突如再燃した創作意欲にだけ支えられて書きすすめられた長編小説でもあるからである。

しかし、この作品はまた作者カフカの意に反して、少くとも他の2つの長編小説『失踪者』(Der Verschollene あるいは Amerika)や『審判』(Der Prozess)に比して最もロマン性に富み、読ませる作品でもありと考えられる。他ならぬ作品『城』そのものの主題と展開は死を2年後にした作者、カフカの生涯の体験と創作の総括であり、集大成といっても過言でなからう。

本稿では作品『城』の成立過程に焦点をあわせて、作者カフカの日記や手紙の中に散在する断片や覚書等の記述を紹介しながら、その執筆への軌跡をたどってみる。

2

作品『城』の成立した1922年という、いわゆる1920年代のこの時期は、作者カフカにとっても、内面的にも外面的にも存在をいよいよおとしに晒け出さなければならない、一面決断の時期であったといえよう。この時期のカフカはまた1916年以来、ほとんど一定のまとまった作品を書いていなく、量的にはわずかに短編集『田舎医者』(Landarzt. 1919)、『父への手紙』(Briefe an den Vater. 1919)、そしてアフォリズム集『彼』(Er. 1920)を数えるしかできず、何よりも書くことへの焦躁感と不可能性との打ち拉がれていた時期でもあったといえよう。この頃のカフカの人生を一覧すると、1917年12月の Felice Bauer 嬢との2度目の最終的婚約解消、いわゆる結婚への挫折感、またその年の8月の咯血以来の病氣進行と不安感、そして職場、労働災害保険局での保養休暇と出勤のくりかえし、その間、父親との関係の悪化、更に1918年に入って『城』のアマーリア像の原型とも考えられる Julie Wohryzek との交際、再度にわたる婚約破棄、1920年に『城』のフリーダの原型とも考えられる Milena Jesenska との出会いと文通といった、一面の閉塞状態あるいは停滞状態と、反面、新たな高揚と情熱との2つの感情の狭間にいたと考えられる。度重なるさまざまな壊滅と不眠と疲労との下で、1921年の4月にカフカが友人 Max Brod に宛てて書いた3つの願望(drei Wünsche)²⁾は、この当時のカフカの素朴な願いを知る上のみならず、後の作品『城』の描写に重ね合わせる時、実に興味深いものとなる。この願いとは1にはおおよその健康(annähernde Gesundheit)、2にはどこか見知らぬ南の国(ein fremdes südliches Land)へ行くこと、そして3つ目は小さいな生業(ein kleines Handwerk)であった。

結局のところ、作品『城』はそれまでの鬱積した多様な不安と諦念からくる停滞状況を、更に顕著になった神経衰弱の症状を克服するかのようにより、一種の集中的な活力と精神の高揚とで書き進められたことは確かであろう。

2.1. 作品中の形態としての城の原像は Klaus Wagenbach の説³⁾によれば、遠く1889年12月に6才のフランツ・カフカが家族と共に旅したという、祖父ヤーコブ・カフカの生村、ヴォセック(Wossek)への思い出に遡ることになる。この地には確かに1つの城があることはあるが、カフカの伝記的研究の第一人者 Hartmut Binder に筆者が直接質問したところ⁴⁾、Wagenbach の説は当時幼年であったカフカの記憶力を過信しすぎ、

全くの仮説にすぎないと退けている。更に作品中の城の原像に影響を与えたものと考えられるのは1911年1月末にブラハの北東、ポーランドとの国境に近い町フリートラント(Friedland)に旅した印象⁵⁾が挙げられよう。1911年1月30日付の日記にある城のある町の風景描写は、後の長編小説『城』の第1章の描写に大きく反映していることは確証される。

2.2. 作品『城』の内容的な習作として挙げられるのは、1914年6月11日の日記の中にある未完の小話、『村の誘惑』(Verlockung im Dorf)である。「かつて夏の夕方に、私はこれまで一度もきたことのない、ある村にやってきた」⁶⁾。この断片的な小品の書出しは、長編小説『城』の冒頭部、「Kが到着したのは夕方おそくであった」⁷⁾に極めて類似した文章であることは否定できない。舞台となっている季節は夏と冬と相違しているが、『村の誘惑』の登場人物はKにあたる主人公「私」(ich)の他に、『城』の村の宿屋の亭主と女将を暗示する宿屋(Gasthof)の夫婦、それから地人や子供を予想させる老人夫婦と数人の子供、また『城』のKに好意を示すハンス少年と謎めいた城の娘(ハンスの母親)を想起させる、一人の少年と繊細で、物静かなクルスター夫人が登場する。もちろんこの『村の誘惑』は単なる断片的素描にすぎなく、長編小説『城』までの距離は遠く、壮大な構想と計算された文章とはその比ではないことは明確である。

2.3. 『城』は1914年11月30日の日記にもあるように、書れたもので未完なもの(Geschrieben an Unfertigem)⁸⁾であり、更に書き続けることも不可能な(Aber auch fast unfähig, den >Prozeß< fortzusetzen)⁹⁾『審判』の限界と終極から再出発した試みと考えられる。「僕はもはや書き続けることはできない。終極の境界線(endgültigen Grenze)にきている。ひょっとして再び新しい未完のまま残る物語(eine neue, wieder unfertig bleibende Geschichte)を書き始めるために、ひょっとして再び数年間、その境界線の前に座ったままでいるということになる。この運命は僕をつまづかす」¹⁰⁾。

とりわけ『審判』の第九章にある寓話、『掟の前で』(Vor dem Gesetz)の内容は城を前にして、躊躇し、あるいは拒絶され、そして徒勞する主人公Kの形姿を暗示していることは否定できない。ただ全般的に見ると、作品『城』が『審判』の延長線上に位置づけられるという時には、いわば逆説的な意味合いをあわせもっていると考えられよう。つまり、作者カフカの意に反してか、作品がより完結的になるという意味とは逆に、むしろ拡散して、肥大化して、もはや收拾の術を放棄せざるをえない作品になってしまうことを意味するからである。

2.4. 形態としての城のイメージには前述した、ヴォセックやフリートラントの城の他に、何よりもブラハの城であり、カフカの生家ともモルダウ河をはさんで対峙してそびえ

る、フラーチン城 (Pražský Hrad-Hradčany) の偉容がとりわけ想起される。この城をあおぎ見ることは幼年時代からの作者カフカの、最も見慣れた、いわゆる日常の風景の1つであったと考えられる。1914年2月10日の日記には、作品『城』の中で、城への道を模索する主人公 K の原像とも考えられる一文がある。「偶然にもいっと僕は反対の道を歩いた、すなわち鎖橋、フラーチン城 (Hradschin), そしてカール橋を。いつもはこの道だと文字どおりきまって倒れてしまう。今日は反対側からやって来て、少し自分を高揚させた」¹¹⁾。

作品『城』全体で K が眺望する城そのものの描写場面は、わずかに枚挙すると6箇処でてくる。すなわち第1章には冒頭の1節、つまり霧と闇とにつつまれた不可視な城を含めて、他に5つの場面が挙げられる。そして残りの1場面は第8章の冒頭^{たそがれ}の黄昏の中の城の印象である。結局のところ作品中の城そのものを直接描写したものは2つに大別される。1つは第1章の中ほどの場面、村に到着し、勢い闘いの意気に燃えている主人公 K の期待を裏切るかのような、単調な集落を予想させる城のイメージである。それはフラーチン城の偉容さとはほど違い、一寒村の尖塔のような貧弱な城であり、K のもつ期待を多く読み取れば取るほど、逆に屈折した城のイメージが浮きぼりにされ、むしろ主人公 K との隔絶あるいは異和感の表現として理解される。この第1章の場面と対称的なものが、もう1つの第8章の描写である。ここでは全体として城のもつ奇妙な魅力に主人公 K は、むしろ畏敬の念と更に一種の諦念を帯びた、自らの運命を重ね合せて、城の印象が語られている。この城に対する K の2つの印象の相違は、村において焦躁感と徒労感を混在させて、ただ行為していく途上にある K の無残さ、むしろ実在を反映したものに他ならないといえよう。つまり城の実態というよりは K の内面の変化によって幾様にもその印象が変化していく、城のイメージはそのまま、また K の内面の実態ということになるところにこの作品の持つ作意を読み取ることができよう。

2.5. カフカは1917年の冬に妹オトラを訪れて、北西ボヘミアのチューラウ (Zürau) で牧歌的な農村生活を体験している。このチューラウも城のある村で、作品『城』の中にでてくる橋 (Brücke) や旅館 (Gasthaus) もあったことを Klaus Wagenbach は報告しているが、そもそも城のある風景はボヘミア地方の中世からの風物と考えることができる。

更に吟味すれば、城のイメージはカフカの勤務した役所やその官庁機構の内実を幻想したものと考えられる。少なくとも現実と幻想の権化として城をイメージすることが、作品『城』の理解の鍵であり、かつ最も重要な問題は、他ならぬ、城のイメージが持つ可変性であり、多様な象徴性にあろう。

2.6. 1912年8月のフェリス・パウアーとの出逢い以降、『失踪者』、『変身』と書きつなぎ、1914年の8月には『審判』、『流刑地にて』(In der Strafkolonie)に着手したカフカにとって、正しくこの時期は激しい創作意欲に駆りたてられた年月にある。しかしその反動なのか、翌15年から16年にかけて、書くことそのものへの自虐的な苦悩、不安に苛まれ、いわゆる創作意欲の減退に苦悩しはじめた。1914年7月にはフェリス・パウアーとの第1回目の婚約解消と度重なる不眠症、更に住宅問題といった、まるで作品『城』のKの現実を想起させる日常生活の中で、「僕は自分を苦しめ、自分の状態を常に変化させた^{すくい}い。この変化の中に自分の救済があると予感していると思っている」¹²⁾と、一面の、自嘲と自虐の調子をこめて、自らの現在を述べている。そして再び確認しなければならないことは「自己苦悩の中にのみ創造的だ(schöpferisch nur in Selbstquälerei)」¹³⁾と、確かな信念をのぞかせていることである。

1916年の7月には『審判』のJosef・Kのみならず、後の作品『城』のKの運命をもまるで予め総括するように、「僕が有罪判決される時には、最後に判決されるのみならず、最後まで自衛することを判決されるのだ」¹⁴⁾と日記してある。『城』の中のKの不幸は自らの罪を悟ることができなかったことと、この日記からも判断でき、またこれは作意上極めて有効なことと考えられる。またKを管理機構に対する単なる反抗者と理解せず、むしろ人間本来の原罪に無知なる者とみなす時、1917年10月の『八つ折り判ノート』(Die acht Oktavhefte)の中の次のメモも、主人公Kの行為を総括的に予め語ったものと考えられる。「2つの人間の大罪があり、それらからすべての他の罪は由来している。他ならぬ^{あせり}焦燥と無頓着(Ungeduld und Lässigkeit)である。焦燥のため楽園から追われ、無頓着のために人間に楽園に戻れないでいる。ひょっとしたら、しかし1つの大罪だけが存在するのかもしれない。すなわち焦燥だけが。人間は焦燥のために楽園から追われ、焦燥のために戻れないのであろう」¹⁵⁾。

2.7. 1916年11月頃からフェリス・パウアーともう1度結ばれたいと望みはじめたカフカは、翌年にかけて、『田舎医者』(Ein Landarzt)、『兄弟殺し』(Ein Brudermord)、『隣り村』(Das nächste Dorf)などの多数の短篇をフラーチン城内に通じる、アルヒミスト小路の住居で執筆していた。そして1917年、34才のカフカは前述したように、8月に咯血、9月に妹オトラのいるチューラニに保養にでかけ、10月8日の日記には4年後に書き始められた作品『城』を「計画された長編小説(der geplanter Roman)」¹⁶⁾と暗示している。12月末にはフェリス・パウアーとの最終的婚約解消という道を辿っていくのである。ただ『城』の成立過程を辿っていく中で、この1917年のフェリス・パウアーとの最後の別離の直前に書かれた、『八つ折り判ノート』にあるアフォリズムは正しく『城』に登

場する村娘アマーリアをめぐるエピソードの解釈を用意しているともいえよう。「人間の行動について下される人間の判断(Das menschliche Urteil)は真実(wahr)であり、かつ無効(nichtig)である。すなわち最初は真実であり、それから無効となる。……本当に判断を下すことのできるは当事者(die Partei)だけである。しかし当事者としてはそもそも人間は判断することができない。それ故にこの世界にはいかなる判断の可能性(keine Urteilsmöglichkeit)も存在せず、ただ存在するのはその幻光(Schimmer)でしかない」¹⁷⁾。

この章句はそのまま『城』の第15章でオルガとの対話から、アマーリアの評価をめぐるK自身の見解と連想して考えられる。「アマーリアの行為は特異であるが、この処為についてあなたが(オルガが)語れば語るほど、それが崇高なのか、些細なことなのか、賢明なことなのか、馬鹿げているのか、英雄的なのか、あるいは女々しいことなのか、いよいよ決しかねます」¹⁸⁾。

2.8. チェコ・スロバキア共和国としてハンガリー・オーストリア二重帝国の支配から独立を勝ち取った1918年のブラハにあって、家庭生活、交友、結婚問題、職業そして文学など、あらゆることに一種の行き詰りを感じていた35才のカフカは、1919年に入って、30才のユダヤ系チェコ人女性、ユーリエ・ヴォリセック(Julie Wohryzek)と知り合う。この女性は『城』のアマーリア像の原型となったと考えられるが¹⁹⁾、この年の6月にはカフカは彼女と婚約するにいたるが、カフカの父、ヘルマン・カフカの反対にあって、結婚にまで進展しなかった。このユーリエ・ヴォリセックとの結婚問題をめぐって、父親と息子の関係は緊張を極め、これを契機として、それまでの両者の葛藤を総括する意味でも、この年、カフカは作品『父への手紙』を書く定めとなったといえる。更に翌1920年の4月には『城』のフリーダ像の原型ともいえる、ミレーナ・イエセンスカ(Milena Jesenská)と恋愛感情をもって交際を始める。そしてこのミレーナからもユーリエと彼女の家族との関係を完全に絶つようにカフカは厳しく要求された。「結局、僕はそれ以上先に進めなくて、それを彼女(ユーリエ・ヴォリセック)に言わざるを得なかった」²⁰⁾と、すでにこの問題で暗礁に乗り上げていたカフカにとっては、6月にユーリエ・ヴォリセックとの関係は3度目の婚約解消という最悪の事態で終局した。

2.9. 1921年の10月にいたって、1917年以来殆ど中断していた日記が再開始され、「不断の発端の不幸、すべてはただ発端(Anfang)にすぎなく、かつ決して発端でないこと」ということの錯覚の欠如(das Fehlen der Täuschung)」²¹⁾と、正しく作品『城』の筋立と主人公Kの不幸を指針してか、自註している。更に数日後の1921年10月19日には『城』のKの運命を見定めるごとくに、次のように極めて直喩的な記述を展開している。「人

間というのはカナン (Kanaan) の地を生涯かけて探知する^{かん}能力を持ちつづける。そして彼が自分の死の直前になって初めて、その地を見るのだということは信用するに足りない (unglaublich)。……モーゼ (Moses) がこのカナンの地に到達しえないのは、それは彼の生が短かすぎたからではなく、それこそ人間の生 (ein menschliches Leben) であったからである」²²⁾。ここでは人間の逃れがたい運命を、まるで義務づけられたかのように、自らの運命と重ね合せて自己観察している孤独なカフカの姿が彷彿としてくる。ロビンソン・クルーソーの漂流した孤島に住む、独身者シジフオスのごとく、自己に対して一種の自閉的満足感にふけりながらも、一方ではユダヤ人であることも含めた自己の^{さだめ}現在を「僕は40年間 カナンの地から外をさ迷ってきた²³⁾」と見極めている。またこの頃書いた断片 (Fragmente) の中で、「祈りの形式として執筆 (Schreiben als Form des Gebetes)」²⁴⁾と告白した後に、「もう執筆を僕はあきらめる。それ故自伝的な調査の計画。自伝 (Biographie) ではなく、できるだけ小さい構成要素の調査と発見とを。それに基づいて僕は自分を組み立ててみたい」²⁵⁾とも言明している。これらの記述からも作品『城』は脱自伝的な視点から構成されている反面、一種の自伝的な意味を秘めて持っていたことは疑いえない。

2.10. 1920年8月に書かれたと考えられる断片の中に、長編小説『城』の冒頭部のスケッチが2箇所読み取れる。「僕は遠くに1つの町を見る、それは君が意味している町であろうか? ……しかも霧の中に幾つかのぼんやりした輪郭 (einige undeutliche Umrisse im Nebel) だけが。そうだと僕はその見える。それは上の方に城塞 (Burg) をもった山であり、山腹には村のような集落がある。それからそれはあの町であり、君の言うとおりで、そもそもが大きな村 (ein großes Dorf) である」²⁶⁾とあり、正しくこれはそのまま作品『城』の冒頭の一節の素描に相当し、作品中の城と村のイメージを先取した断片と考えられる。もう1つは作者カフカが生涯をおくった、ボヘミア地方の都会、多くの異邦人が集まるジブシーの町でもある都会プラハと、作品『城』の城のある村を重ね合わせたような町の素描である。「長い間、すでに長いこと僕はあの都市へ行こうと思った。それは大きな活況を呈した都市である。そこには幾千もの人間がそこに住んでいて、どんな異邦人 (Fremde) も出入りしうる」²⁷⁾とある。

2.11. 1922年になると一方では、執拗なほどの自己観察による限界と認識と不安観念、他方では書くことによる奇妙で、謎に満ちた救いの感情にとらわれていた²⁸⁾。つまり内なる2つの世界の境界線に躊躇しながらも、この絶えず震え動く境界線を一步だけ踏み出すことを、あるいは飛躍なき新しい助走、後に中断を余儀なくされる境界線からの助走をカフカは決意するにいったと云ってよいのであろうか。家族や結婚をも激しく求めながら

も、その実、そうした共同体との一線を画す境界地帯に住みついて、ただわずかに踏み越えることへの突進を不眠と疲労の中でカフカは試みていたとも考えられよう。病氣療養をかねてチェコとポーランドとの国境地帯、シュピンドラミューレに出掛ける前の1922年の1月中旬の日記は、予測しがたい喜ばしい観察をともなう、上昇への道を願う決意をも読みとることができる。『地上的なものの最後の限界への突進』(Ansturm gegen die letzte irdische Grenze)²⁹⁾、かつ『この文学のすべては限界への突進』(Diese ganze Literatur ist Ansturm gegen die Grenze)³⁰⁾とまで言明する時、そこには作品『城』の執筆開始を前にした、カフカの緊迫した自己規制と自己観察に基づく、ほとばしるほどの創作意欲を感取できよう。

2.12. 1922年の1月27日に14日間の療養休暇の予定で、雪の中のシュピンドラミューレ (Spindlermühle) に到着したカフカは「ここシュピンドラミューレを一人で、その上暗闇 (Dunkel) の中、雪に断え間なく足を滑べらせる見放された道の上で (auf einem verlassen Weg)、その上、全く地上の目標を持たない (ohne irdisches Ziel) 無益な道 (ein sinnloser Weg) を」³¹⁾と、2日後の1月29日に日記している。ここには何よりも荒涼とした雪景色を場面とする作品『城』の風景があり、更につづく日記では作品『城』執筆直前の張りつめた決意が生き生きと語られてもいる。「ただ前進を、空腹な動物よ。食餌や呼吸に適した大気や自由な生へ通じる、たとえば生の背にあるにせよ。汝、大軍を導く、背丈ノッポの司令官 (Feldherr) よ。他に誰れも見つからない雪の下に埋もれた山間の狭い街道を、絶望した者達 (die Verzweifelten) を導きたまえ」³²⁾と、自らを奮いたたせている。

2.13. 『城』の執筆開始は果して1922年のいつであったか、正確な日付は結局不明であるが、画期的な Kritische Ausgabe の編者である Malcolm Pasley はカフカのシュピンドラミューレの滞在中、すなわち1922年の1月下旬としている。その論証の1つとして2月8日のシュピンドラミューレからの消印で、カフカが友人マックス・ブロートに宛てた手紙を挙げている。「親愛なるマックス、残念です。君が2、3日間もやって来らないというのは残念。僕は運がよければ1日中、登山をし、檣で滑走できるし、執筆もできる。特にこの最後の分による結末を、期待する結末を (das wartende Ende)、平和な結末を (ein friedliches Ende) 呼び寄せることができ、かつ時期を早めることができる」³³⁾。この記述からすると、カフカは新しい創作過程に入り、それは他ならぬ Schloß-Roman の開始を指示しているという。もう1つの論証として Pasley はカフカの執筆用具を挙げている。つまり『城』の第1ノートは鉛筆で書かれていることである。カフカは執筆には圧倒的にインクを使用していたこと、例外として旅行等の場所の移動の際にだけ

カフカは鉛筆を用いたと云われていることから、Schloßgeschichteの書き出しはこのシュピンドラミューレの滞在中というになると Pasley は結論づけている³⁴⁾。この見解に対して Hartmut Binder は作品『城』の執筆開始日時の厳密な決定は困難だとしながらも、その開始をシュピンドラミューレからの帰省後、ブラハでの1922年の2月末としている³⁵⁾。

実際に作品『城』は出版のための清書原稿もなく、ただ残されているのは6冊のノートからなる草稿 (Handschrift) だけで、異稿につづいて何の表題 (Titel) もなく書き始られている。後にこの書き出しの前に一行、マックス・ブロートの手によって >Hier beginnt der Roman "Das Schloß"<³⁶⁾ と記せられたにすぎない。周知のように、現在我々が手にする版は大別して、カフカ死後の1926年マックス・ブロート編集の初版本と、1946年第3版の戦後版本と、1982年に西ドイツは Gesamthochschule Wuppertal のブラハ・ドイツ文学研究施設 (Forschungsstelle Prager deutsche Literatur) による Handschrift 版の3つがある。この画期的な原稿版によると、第1章から大方は流れるように書き進められ、第3章の執筆時に、叙述の姿勢、いわゆる主人公 ich を K に書き変えられ、全体としては最初の叙述軌道はさまたげられないまま一気に書きつなげられたと考えてよい。そして第4章の終りになって初めて、いかに粗筋 (Handlung) を展開あるいは継続すべきかという一種の不安定さが目立ってきている。作品『城』の構想も執筆開始も友人マックス・ブロートには少なくとも3月までは内密にしておいたが、3月15日付のマックス・ブロートの日記では、その日の午前中に『城』の冒頭部をブロート宅で朗読したとある。また同じ頃、1922年の春とあるが、友人ローベルト・クロップシュトック宛に『城』の執筆経過をもらしている。「神経衰弱 (Nerven) と呼ぶものから僕を救うために、この間から少しづつ書き始めている。およそ夕方7時頃から机に向うが、何もできずにいる³⁷⁾」と記して、翌月には中止して、役所にまた出勤している。カフカはこの長編小説を外見上、短篇『最初の悩み』(Erstes Lied) を書くために中断したとも考えられる。一方、1922年の3月上旬の日記の中では、「昨日は最も悪い晩で、まるですべてが終わった (zu Ende) かのような感じがした³⁸⁾」とも記していたことから、再び保険局で職務を果す健康状態にあるかどうかは疑わしいものでもあったといえよう。そして4月27日には5月5日から5週間の年休を願い出ている。何よりもこの長編小説『城』は38才のカフカの、再び焼然し始めた執筆への意欲と健康状態の悪化の狭間に書き進められたに他ならない。このことは作中の登場人物描写に müde, Müdigkeit, Ruhe, Unruhe, Schlaf 及び schlaflos また krank あるいは verlassen という語が多用されていることから明かされる。

2.14. カフカの『城』は発刊されることを予定していなかっただけに、題名も命名されず、各章の区分も当初つけられていなかったが、Handschriftによれば執筆途中にまず15章に分けた Titel が作者カフカによって付せられ、かつ第15章のオルガが語る4つの挿話も付記された。ただ各章の区分はマックス・ブロート編集の初版と戦後版そしてHandschrift版ではかなりの異動がある。Handschrift版付録のApparatbandには執筆内容の経違が簡条してまとめられてある。一覧すると、『城』は正書法による訂正の他に、3回以上にわたって書き改められたり、数行にわたって省略、縮少された箇所は実に129箇所にわたっている。特に第2章、第5章、第6章、第8章、第9章、第12章、第16章、第23章、第24章、第25章には数頁にわたる削除部分がみられる。また語彙の観点からして、全体的にみて、当時のブラハ・ドイツ語方言が多用されている。一例として、Gebüren, Kasten, Polster, Pult, Schnufpen, Tasse, gieng, paar Stunden, nur schon, ohneweiters 等があり、かつ不変化詞 vielleicht や同一名詞のくりかえし使用が頻繁であることも見逃しえない。また執筆リズムはある時は流れるように、ある時は淀むリズムで書き進められていて、それはまるで1つ1つ重ね合わせるような日々の作業であったといってよい。7月5日の手紙には「書くことが（das Schreiben）僕を支えている」³⁹⁾と断言しつつ、不眠と疲労の中で、「日光を浴びて物語（Geschichten）を書いている時は、上ではもはや何も分らないでいる。ひょっとして他に書くことがないのかも、僕はこのことしか知らない。不安が僕を眠らせてくれない夜中には、僕はこのことしか知らない」⁴⁰⁾と、飽くまでも書くことに固執した。当時のカフカの夜の執筆作業は正しく限界への突進に他ならなかった。

2.15. 7月12日にマックス・ブロートに宛てた手紙に「そして書くことは？（いずれにせよ今度の場合は中程度下以は進んでいる。それ以外ではない。そして絶えず騒音に脅かされて）」⁴¹⁾と、書きつづっている。続く20日には、かつて『城』の一部を朗読で聞いているマックス・ブロートに、すでに『城』の創作ノートを手渡していたらしく、「君が僕の（城の）ノート（Heft）をもう読んでいるかもしれないということが、実に恥かしいし、そのノートは書くためのもの（zum Geschrieben）で、読ませるもの（zum Gelesenwerden）でないことを僕は心得ていたにもかかわらず、君の短篇小説のお返しに敢えて君に渡したもののなのだ」⁴²⁾と、宛てていた。この1922年の7月にはすでに作品『城』の執筆は緩慢な進行ながら、第20章を越えていたようで、7月24日にローベルト・クロップシュトックに宛てた手紙は第23章の Bürgel-Episode に匹敵する記述と考えられ、従って、この時点でカフカは第23章前後の、いわゆる最終部にさしかかっていたと判断できる。「もし僕達が正しい道にいるならば、そのような諦念^{あきらめ}でさえも果てしなく絶望的なこ

とであろう。しかし僕達はただ1つの道にいるにすぎなく、その道はともかく第2の道につながり、更にそれが第3の道等々と、それに加えてまだまだ正しい道は現われない、ひよっとしたら全く現われないかもしれない。それ故に僕達は全く不安定なものに (die Unsicherheit), がしかし不可解で美しい多様性 (die unbegreiflich schöne Mannigfaltigkeit) に身をまかすことになるとしても、希望の実現 (die Erfüllung der Hoffnungen) と特にこのような希望は常に予期せぬが、絶えずそうしたことに可能な奇跡 (das immer unerwartete, aber dafür immer mögliche Wunder) のことなのだ⁽⁴⁾。

この7月にまたカフカは健康上の理由から保険局を退職し、その1ヶ月後の8月下旬には長編小説『城』も未完のまま放置され、ついに再び書き進められることなく、その草稿 (Manuskript) は9月下旬に女友達ミレーナに手渡され、後に友人マックス・ブロートの手に委ねられて、カフカの死後、2年目の1926年に初版が刊行されるという経緯をとるのである。

9月11日は作者カフカは『城』の執筆放棄宣言をマックス・ブロートに次のように手紙している。「今週はそんなに楽しく過ごせなかった。というのは城の物語 (die Schloßgeschichte) を永遠に (für immer) 放置させなければならなくなったからである。君が知っているものほど、全く悪い出来でない (nicht ganz so schlecht) にもかかわらず、ブラハ旅行の一週間前に始まった>挫折<(Zusammenbruch) 以来、再び書きつなぐことができなかった⁽⁴⁾」。

3

以上、フランツ・カフカの遺作『城』の成立過程を概観したが、何よりもこの作品の成立は作者カフカの深い2つの計画された意図、すなわち書くためのものと自伝的なものとに支えられながら、それまでのカフカ自身の人生と創作への意図(あるいは意欲)とが幾重にも集積し、かつ力学的に展開され、総括された過程をもっていると確認できる。そしてまた何よりもその構想はますます錯綜、かつ肥大化の一途をたどり、ついに作者カフカの病気の悪化と合いまって、收拾のめどもなく、放置される執筆過程をたどったことになる。このことは他ならぬ、フランツ・カフカのほとんど完結しえなかった人生と作品とをあわせ読む時に、作品『城』もまた逃がれがたい成立過程の定めを持っていたと考えられよう。

Anmerkungen

- 1) Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. S. Fischer, 1958, S. 396.
- 2) Ebd. S. 315.
- 3) Wagenbach, Klaus: Wo liegt Kafkas Schloß?, Kafka-Symposion, Verlag Klaus Wagenbach, 1965, S. 169ff.
- 4) 筆者は昭和57年度文部省長期在外研究員として、1982年から1983にかけて西独のルートヴィヒスブルク教育大学の Hartmut Binder 教授の下に留学。
- 5) Kafka, Franz: Tagebücher 1910-1923, S. Fischer, 1983, S. 425ff.
- 6) Ebd. S. 278.
- 7) Kafka, Franz: Das Schloß. Kritische Ausgabe. S. Fischer, 1983, S. 7.
- 8) Kafka, Franz: Tagebücher 1910-1923. S. Fischer, 1983, S. 324.
- 9) Ebd. S. 325.
- 10) Ebd. S. 317.
- 11) Ebd. S. 256.
- 12) Ebd. S. 332.
- 13) a. a. O.
- 14) Ebd. S. 363.
- 15) Kafka, Franz: Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande. S. Fischer, 1980, S. 54.
- 16) Kafka, Franz: Tagebücher 1910-1924. S. Fischer, 1983, S. 384.
- 17) Kafka, Franz: Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande. S. Fischer, 1980, S. 64.
- 18) Kafka, Franz: Das Schloß. Kritische Ausgabe. S. Fischer, 1983, S. 312ff.
- 19) 芳野 昇: カフカの「城」に関する試論Ⅱ, アマーリアをめぐる覚書. Res. Rep. Nagaoka Tech. Coll. Vol. 14, No. 1, 1978, p. 10—p. 18.
- 20) Klaus Wagenbach の評伝「Kafka」(Rowohlt 1964)によれば1963頃に発見されたカフカがユーリエ・ヴォリセックの妹にあてた手紙 (An die Schwester von Julie Wohryzek. 24. 11. 1919) が参考になる。
- 21) Kafka, Franz: Tagebücher 1910-1923. S. Fischer, 1983, S. 390.
- 22) Ebd. S. 392.
- 23) Ebd. S. 406f.
- 24) Kafka, Franz: Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande. S. Fischer, 1980, S. 252.
- 25) Ebd. S. 281.
- 26) Ebd. S. 241.
- 27) Ebd. S. 210.
- 28) Kafka, Franz: Tagebücher 1910-1923. S. Fischer, 1983, S. 406.
- 29) Ebd. S. 398.
- 30) a. a. O.
- 31) Ebd. S. 407.
- 32) Ebd. S. 412.
- 33) Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. S. Fischer, 1958, S. 370.

-
- 34) Pasley, Malcolm: Der Schreibakt und das Geschriebene. Zur Frage der Entstehung von Kafkas Texten, Franz Kafka-Themen und Probleme. Vandenhoeck und Ruprech, 1980, S. 12ff.
- 35) Binder, Hartmut: Kafka Kommentar zu den Romanen. Winkler, 1982, S. 262ff.
- 36) Kafka, Franz: Das Schloß. Kritische Ausgabe. Apparatband. S. Fischer, 1983, S. 120ff.
- 37) Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. S. Fischer, 1958, S. 374.
- 38) Kafka, Franz: Tagebücher 1910-1923. S. Fischer, 1983, S. 414.
- 39) Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. S. Fischer, 1958, S. 384.
- 40) a. a. O.
- 41) Ebd. S. 392.
- 42) Ebd. S. 396.
- 43) Ebd. S. 398.
- 44) Ebd. S. 413.